

特 54

64



一松斎芳茶也

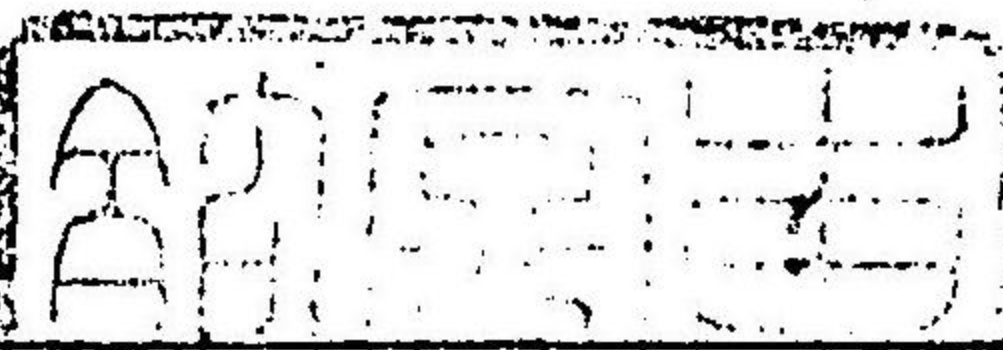
江戸
 雜
 任
 意
 隨
 書
 意
 分
 切
 冊

壹番目 東叡山農夫願書

○序幕 將門山鎮守祭禮の場(代官邸實印取の場) 鎮守村芝居の場○二幕目 江戸邸門訴の場(同奥御殿酒宴の場) 同返し御玄關先早打の場○三幕目 上野山ト茶見世の場 忍ヶ岡穴の稻荷の場(淨雲院用部屋の場)○四幕目 木履街道雪降の場(枝川堤渡小屋の場) 木内惣五郎住居の場○五幕目 東叡山淨雲院の場(御盤屋内直訴の場) 大詰六幕目 江戸邸怪異の場(佐倉本城駈付の場) じやうしうをりたてしのおほじま

役割

織越上野正知	片岡 我童	國定忠次	尾上菊五郎
英壽院	關 三十郎	清水音之丞	尾上菊之助
深澤初五郎	市川 壽美藏	おぼこ三代吉	中村 福助
赤石典膳	市川 猿十郎	小性印幡門彌	岩井 此系
渡し守甚兵衛	市川 新藏	五三郎妻お竹	尾上登美松
修驗者秘門院	岩井 松の助	内藤者龜吉	尾上 松助
川村新吾	中村 相藏	小猿傳吉	
物五の姑お千代	中村 翫太郎	水屋千助	
鳴神音右衛門	片岡 丸童	氷上軍次兵衛	
瀧澤村六郎兵衛	中村 歌女之丞	物五妻お峯	
尾原村半十郎		老女小令井	
夏根左内		鶴屋の抱おさの	
博勢傳藏		傳吉妻お作	
樽屋五三郎		將軍氏綱公	
薩島勇藏		鈴木五郎兵衛	
中老花の井		家老織越大和	
辰右衛門妻お兼		高林隼人	
鶴屋の抱お花		山番惣助	
忠次妻おまん		木内宗五郎	
勝田村重右衛門		稻舟河内守	
多賀四郎兵衛		千葉村忠藏	
横田五平次		川越播磨	
庄屋悴藤六		淨雲院僧正	
牧野逸平		岩窪の玄哲	
作太夫娘お君			以下略ス



第壹番目 東叡山農夫願書

○序幕 將門山鎮守祭禮の場 本舞臺正面在所の遠見出茶屋有愛へ百性大勢揃の手拭にて芝居の小道具を釣臺に乗出來り(百)今日祭禮ゆゑ若い者の奉納芝居をやらかせと酒を呑で居るト里娘出來りお祭を二年の間休んだ事を聞(百)夫の一年跡は城代が替てらるる用金だの年貢の二割増上二千三兩ト上納を云付られ二百廿九ヶ村の難澁を思ひ公津村の惣五旦那が歎願で代官も開濟三年此方取立られた諸税も免除又成るとの事ゆゑ此年の祭をするト此筋の演詞有向ふ方樽屋五三郎の妻子役を連出來るを見て(百)大旦那五兵衛様の外目の事小前の者を助けんと役人と議論をなされ永の入牢一同お氣の毒お存ト升是も非道の代官おゑト云爰へ下手な博勢傳藏(猿十郎)出來り私馬運上の取立方だ五兵衛殿が地獄の苦しむ(女)升役所の株を持たが災難お上仰付の箱舂を持ゆる時の小前の難義を思ひ(傳)親父を助ける工風を

第壹番目 東叡山農夫願書

断すも爰の往來サア社内へごんせト樽屋の妻を連傳藏上手へ遣入(百)傳藏の云事ト皆々顔見合道具廻る○代官實印取の場 本舞臺都て代官邸住居の休爰お名主四人膳に向ひ下女が酌をして馳走又成つて居ると奥より代官牧野逸平書面を持出る名主平伏する(逸)名主頭取木内惣五郎の如何致した(名)へ一病氣又付代人義兵衛尤も實印の義の全快次第本人持參調印致し升る(逸)ム、然れば四人の是へ調印致せと白紙を出す皆々白紙へ押印ト顔見合(牧)涉城代の恣意は叶様此方が認める故心置無調印すべし是は四人の調印して差出すト逸平の奥へト入後向ふ方樽屋五三郎出來り見五兵衛殿の出牢を願はんト名主へ願爰へ以前の逸平出座するを見て(五)此度諸運上も免せられるも就て何卒五兵衛殿の御執成を願上(逸)ム、年貢の増を免除お成と誰がヤした五ヶ年分を一時お上納致度と如斯書面迄出し願ふ故馳走致置お何とたわ事をヤト以前の白紙入墨をして見せる(名)胸り

し扱ハ一ツばい欺りれたリ(逸)首と釣替の實印を押して置
此官を嘲弄する不屈者今又見よ五兵衛を始已等も覺て居
ト奥へは入跡に名主四人五三郎無念の仕打にて道具廻る
○鎮守社村芝居の場 舞臺正面巴の幕を張祭禮の休爰よ
百性大勢集り曾我對面の茶番をして居ト向より村の者駈
來り(遣)今日代官方へ名主様たちを偽り呼で白紙印を
押せ五ヶ年貢を前納すべいと云事を代官が跡で書入大駱
動がはじけた(百)夫の大變だト大駱おて向ふへは入跡樽
屋五三郎の妻ト子役下女逃て來る續て跡を博勞傳藏追駈
出來り親父を牢から出して遣のらおれの心も隨へと挑爰
へ以前の五三郎出來り傳藏を突のける是よ女房子役下
女の向ふへ逃ては入跡傳藏の怒り脇差を抜五三郎へ切て
蒐る立廻りの處へ村の者が大勢出來り傳藏を打すへ皆々
下手へは入跡傳藏起上り向ふを白眼幕
○二幕目 江戸邸門訴の場 舞臺正面家根附の門都て織
越家表門の休爰へ簀笠よて百性大勢出來りへいゝ願

ふムリ升ト門際小押懸るト小門を開き惡侍貳人出來り當
お役郎を何と心得る早く退散と云を見て百性袖も縋りお
願がムリ升と云乍ら打擲をする侍の驚き門の内へ逃込
(百)サア命を捨る氣から恐る物ねへ播摩様と大和様の
外の誰でも打のめせと駱をり門内へ織越大和出て殿の傍
恥辱を辨へざる不屈至極重立たる村役人の誰ゝなるぞ
(惣)へいゝ扱の傳家老様もムリ升るのト恐るゝ出て
へい私しの公津村名主惣五郎へい千葉村の忠藏灘の澤村
の六郎兵衛小泉村半十郎服田村重右衛門高野村三郎兵衛
其外傳領分二百四十ヶ村一村に付壹人宛物代罷出まして
ムリ升るト願書を出す大和の書面を請取篤と巨細承り
度ゆゑ我小屋へ惣代五人參るべしと大和先に五人の名主
門内には入跡(百)願書を傳請取よ成つた故案必と悦ぶ爰
へ門の内へ惡侍出來り(侍)百性共宿止る時物入も掛
る故お賄いを下されるよ付麻布の下邸へ參るべしと大和
殿の仰せ(百)有難く存し升と侍の跡も付皆を向ふへは入

跡赤名典膳出て(典)大和の指令と偽り百性共を麻布へ還
込打殺時の農民共ハ大和を恨再度の騷動を起させそこへ
付入播摩大和お詰腹切せ織越家を横領とる兼ての工と思
ひいれ道具廻る

のガ認めしよし(正)コリヤ聞届遣せ其方大義乍國元へ
下り諸役人を取調し他見を許ぬ此願書予が預り置と懷中
よ入奥の間よは入(大)願書の摸様おてハ江戸表よも一味
の者ガ(典)エ、大和殿お先へ退散やすと兩人ハ顔見合向
ふへ歸る跡奥方中老花の井出來り傳國表へ傳出張よ就て
ハ江戸國兩様の勤るまト君の仰せ(大)江戸表ハ川越殿
を助役に願ひたし(花)傳前様の仰せも其通り(大)人の中
よも人ぞ知る(花)人の撰をと思ひ入道具廻る

○奥邸酒宴の場 正面銀張の 襖 燭臺を照し爰よ織越
上野正知奥方始め中老侍女酌として酒宴の摸様に茶道盆
齋踊りを見せて居るト向ふ茶道賑來り唯今傳國表の百
性大勢門訴小參りし處傳家老の大和様が惣代四人をお
小屋へ傳同道成され傳説得中ムリ升る(正)然らハ酒宴
を止め大和を待んと云爰へ佞臣赤名典膳横田五平太忠義
顔おて出來り人拂いを願ひ播摩大和心を台傳領分の名主
木内惣五郎とすする者を計り農民を煽動させ門訴一發を
起させ傳家家を横領する所存と謔言すれ共正知ハ半心半
疑にて承諾せず爰へ近習の案内ハ連大和出來り平伏して
農民方の願書を正知小差上る正知ハ願書讀んで(正)一字
一點誤りなく何者の手跡あるぞ(大)岩橋村惣五郎とすも

○本舞臺元の表門の場 爰へ以前の百姓金十郎駈來り五
人の衆も今頃のサソ責られて居るであらうとらつづく爰
へ門の内より若黨よ送られ惣五郎先よ四人の名主出來る
(若)大和様のお下りの延刻とるゆる宿屋おて傳沙汰と待
れよト若黨の内へは入跡金十郎ハ飛出し(金)モシ旦那様
方大變が出來ました先刻傳門内へ入れました跡大和様の
仰とて大勢宿屋よ居てハ物も懸るもゑお賄を下される
よ付下邸の長家へ參れと厚いお達しよ一同が悦び麻布の

お邸へ行道で私の腹が痛出し久太と畑右衛門あ介抱され跡方行て見ると邸内での皆々が縛れた大騾又久太と畑の在處へ注進に行私の旦那方へ知らせませぬやうにやしたト是を聞五人不審を起し立戻る處へ門番所を横田出て領主ふそむく百性めら殿も大和も同腹中心ゆるせも大馬鹿者(五人)扱ハト四人無念の思ひ入れよて立戻るを(惣)サ、宿へ歸りて(四人)餘とせせバ(惣)マアト止め引込めて幕

○貳幕目引返し 緋越玄關先の場 真中大玄關都て邸内摸様爰は以前の赤名典膳横田其外居あらぶ向ふより早打ふて川村新吾出来るを發汗を吞せる新吾の心付大和殿の副使として彦領内へ参りし處農民共一揆を起し討て出家來の手負となり漸く切抜注進致す又大和殿も存亡の程も計られず(典)此由君が申上彦賢慮伺はんと立上る爰へ川越播摩出來り上使を對し手向ひとの言語同斷大和殿の存亡心元奇しと心配の思ひ入向ふより早駕ふて大和出來る播摩指令茶道出て藥湯を吞すト大和の心付拙者上使と

して領内へ至りし處農民一揆を起し鋤鋤竹鎗を以て諸役所を破却し將門山へ籠籠たる國の動亂實は小人の養い難し五人の名主を歸村させしよ彼等の當地は逗留中血氣よそやる匹夫の動亂(播)是とすも大和の名を偽り百性共を下邸へ追込打擲せし事を聞し拙者が駈付助け歸村させしかバ(大)扱ハ動亂をさせんため悪人が工よると無念の餘り典膳と議論の處へ奥長上下よて緋越正知出來り怒りの面色よて役人共が非道をせし計りてあく農民等が増長を領主へ侮り憎さ奴恨まバ恨め一揆頭取一々召捕りうさめを見せん(播)スリヤ讒言をお用有り(正)汝も落度整しておろふ(播)何卒彦賢慮を(正)エ、くとひわへト振拂ひ播摩ハ平伏する正知ハ立腹ふて向ふを白眼幕

○三幕目 上野山下茶見世の場 正面山王山を見たる遠見の書割上手出茶屋有り爰へ博勞傳藏悪者二人を連出來り佐倉詞の者と見たら知らせて呉ると頼ドレ馬鍋で一ばい呑ふと三人上手へは入後前幕の名主忠藏六郎兵衛出來

欠

MISSING

る跡女乞食お兼子役を連出忠藏を呼留る詞を聞佐倉領の者と心付お兼を連茶屋に至りおまえは佐倉の者と見請たが何の人や(兼)私し印旛の辰右衛門が妻子の者(忠)扱ひ悪人夏根佐内を竹鎗よて殺せし人の妻(兼)夫の召捕れ死罪成り私し村中の情で漸く退れ乞食と造成せしが此上野の弟が居との事ゆる尋ね参りましたと云より忠藏は金を思ひお兼の居處を聞上手へは入跡傳藏二藏三太出来るを見て(兼)おまへ博勞傳藏弟を何れへのとわかせしや傳サ、お兼かト三人ふてお兼子役を引立下手へは入跡筒井屋五郎兵衛人入の拵へ出て出来り茶屋の娘が嘸しを聞お兼を助けんと跡と追懸は入ト道具廻る(忍々岡元の稻荷の場 池の端を遠見の書割爰は三人立懸お兼を取巻(傳)十年跡に女と間違ひ己の弟をのとわのし湯島へ賣たへ此傳藏思ひあきらめ女房おかれと挑(兼)人非人の己の自由にあるふや(傳)辰之助を打て彼生させると子役を賣るお兼の泣きけ爰へ以前の五郎兵衛駈來

り三人を投る姿を見て二藏三次のヤア親分のト下手へ逃入跡傳藏刀を抜切て蒐り立廻りの末組伏られ(五)上野一山へ人入出入の鈴木五郎兵衛を知ねへか(傳)エ、許して下せへ(兼)弟を盗みし博勞故(五)サア弟の有家を白状しるト打傳藏の苦しみ上野の淨雲院お居る(五)扱ひ門彌さんへト投る傳藏の悔りし向ふへは入(五)其形で弟へ面會も出来めへうら私の内の借着をしても(兼)段々の傳信切有難ふ存じ升るト伏拜ひ事あつて道具廻る○同山内淨雲院の場 舞臺正面白地中形の襖都て院内廣間の休名主忠藏六郎兵衛が惣五郎は面會も来て待て居る上手を惣五郎出来り互は無事を悦び(惣)此二月出府して門訴うら傳勘定傳老中迄罷訴せしを傳大老様は傳仁心にて密に當院へ私を預られ大僧正様迄傳發下されしが領主の立腹強く十八石お替ても願ひ聞届けぬ只一揆の頭惣五郎も傳渡し下されとの仰せは院主も傳當惑の由(忠)我々が一年餘り歸村せぬ惣代の名主は江戸へ出て遊女

通じをして居る杯と風聞し昨日村の小前の者宿へ尋來て大聲上てうありし故モウ宿より居られず残念と思ひ升(物)共立腹の尤もたが願さへ貫けり大手振て歸り升と兩人を宥る(忠六)宿への返られぬゆゑ近在隠れ便りを持升と暇として歸る後影を見て是が此世の別かと惣五郎の涙と吳奥へは入跡院代英壽院ト小性門彌出來り惣五郎を助け願意を貫かせんと密談めて道具廻る

○同院内用部の体爰へ下手の障子を明惣五郎入來り思案の体(惣)地頭の非道國政の苛酷は村民を助んど種々よ心を碎け共最早手ごてもつきたるト脇差を出し中身改ため此上の領主の門前まで切腹し殿は附添死とも魂魄を殘し苦民を救いで置べきかと机に向ひ遺書を認め居ると奥方英壽院と門彌出來るも惣五郎の胸くり書置を隠す(英)死ぬると覺期成されし上ハナセ涉直訴を成されぬ當院を立退切腹の涉決心(物)エ、元國を出し時方命を捨し身の上故將軍家へ(英)如何も來春二月廿日の二代將軍の涉當



み下手に駕を卸しあり駕屋兩人喧嘩をして居るト向ふ方地方見廻り役人組下を連出來り喧嘩を止め駕の中を改める駕やハ下手へ這入跡博勞傳藏一本差めて出來り今跡ク

日か成の節より手引をしてト惣五郎の義膽を察し英壽院が門彌の頼みより命を懸て助力する件門彌の元下總國印旛郡岩橋村の農民六助の次男にて當春此方へ引取節抱へ主方(門)始て生國を承知し村民の苦を助けんため英壽院様へ願ひました(惣)扱の十年跡ハ行衛知れざりし六助の二男てムリしりト悦ぶ爰へ井筒屋五郎兵衛門彌の姉か兼一子辰之助を連出來り十年よりして姉弟の面會をし父辰右衛門の仕置成りし事を語り愁歎を見て(英)大望の當日迄の日合もあれハ義理有母や妻子も跡て迷惑の懸らぬ様せめて分れを(惣)といへハ鶴の目鷹の目容易ふ國へ(英)其義ハ鈴木五郎兵衛ハ頼われ(五)身も引受佐倉迄お供さん(辰)おつうア雪が降て來た(惣)古郷へ忍ぶ雪の助けを幸ひお進めハ随ひ升る(英)天運化して爰へ餓別せん淨雲院出來り母ハ土産の二包と金と渡す(惣)何うら何迄有難しと金を戴き伏拜を幕

○四幕目 木庵街道雪降の場 舞臺真中辻堂左右敷だ

ら來る眼の大きな野郎ハ惣五郎ハ相違ムりませぬと告る是にて皆々左右へ忍ぶト向ふ方鈴木五郎兵衛十の字合羽笠を面を隠し出來るト以前の捕人十手にて打て荒るを授のけ(五)何奴あれハ無禮千萬ト笠を取を傳藏見てエ、違つたト驚き兩手をつき眞平涉用捨とわびる(五)此先共十ノ字合羽を見てをけト怒る役人皆々面目無向ふへ逃ては入後以前の駕屋出て惣五郎の此辻堂ハお隠し申ました(五)涉苦勞であつたと辻堂の内ハ入惣五ト合羽を着替

惣五ハ五郎兵衛の合羽を着て出來り(五)其十字の合羽で此支配さへ通り抜れ(惣)本街道通らずして(五)木庵道の大きき當りト五郎兵衛ハ駕を乗り離分道と氣を付て(惣)何から何迄涉世話に成り升と立上る道具廻る

○枝川堤渡小屋の場 舞臺一面土手上手渡守の小屋都て雪中の体「降しきる雪ハ畑野の銀世界今ハ肩身も巾袂さ小笠ハ忍び夜るの道ト

向ふより惣五郎出来り(惣)久々歸る我土地も去年の冬よ引かへ人家の其儘荒果て日昏たれと雪のり見得るの覺の渡し口ト小家の前へ来てコレ頼升へ舟を出て下され(甚)彦代官を嚴敷おふれ夜舟の出されぬ明日よさつしやれ(惣)サアそふでもあろふゴレ甚兵衛余人でいさい私トや(甚)人の名を呼付あするの誰だト小窓を見えてヤア公津の旦那様かト焚火を吹消し惣五の手を取り小屋の内へ入(甚)此詮議嚴敷中を涉無事でふりました(惣)サア知ての通り此二月江戸へ出張し領主を始め公事方奉行月番彦彦老中迄願つても願書の其儘差戻されしが在所に残せし義理有母や内の様子又組合の衆もあんとられ歸つて来たが少のちうち村のあれ(甚)サア役人衆の邸を破却し其科よて追々拾ひ上られ水牢の苦しみ地頭の下知よ背くの皆惣五郎がさせる業憎しと思ふ妻子あれ共人質のため宅へ置トお内の廻りの隠し目付此渡し場の暮六ッ限り舟を引上代官より錠を卸し渡し事も成りませず

(惣)此惣五郎が命懸二百廿九ヶ村を必らず救つて見せ開る母や妻よの私グ来たと傳言頼サアト立上る(甚)何れへお出成され開る(惣)段々の漸しを聞上の永居致すも無易の渡し場(甚)命を捨て逢ふ出成されし物何で返され升跡の難義の此身一ツをト錠おつ取鎖を打切(惣)ヤ、コリヤ鎖を(甚)アモンだまつて舟へのらつしや(惣)何おも言ぬ添けあいと拜甚兵衛の舟を突出すト此道具廻る○木内惣五住居の場 本舞臺名主宅の体爰惣五悴惣平次男喜六手習をして居る傍女房お峯火鉢の前居小前の者の女房兩人来て領主を恨むをお峯が止め夫の留主を知つて博勞の傳藏が毎夜の様よ来て困り開る(村女)左様なれば毎晩上り升と眼をつげ下手へは人後お峯の子供よ菓子をとたへ(峯)モウ四ッ時ドレ寐升と表ての戸締をそる(子役)母様父様の未だお歸りよ(峯)程あくた土産を澤山持てお歸り成るぞよ此時向ふ惣五郎出来り四方見廻し門口を叩く(峯)此大雪よ降でる(惣)おれトや(峯)

誰じやへ(惣)お峯おれトや(峯)エ、旦那様どき(子)エ、父様グト云を口を止門口を明る惣五内お入と女房子供取すぐり悦ぶ惣五の足を洗ひ上り(惣)此度漸く願ひも届く様よ成りしゆを歸村せし子供を寐くせよとの指令に女房の子供を連興へ入跡屏風の影よ寐かし有子を膝よ抱あげ(惣)賊よ子供い佛じやあア九ツの鐘を限よ約せしゆる甚兵衛も侍わび居んト懐中遺書と金包を取出し母の枕元へ置伏拜立出んとするト母の起上りコレ惣五郎何國へムる手當の金と去状を置他國する心のと星をさされて今のは迄と英壽院の情に因り將軍家へ直訴致す時身い重罪よ處せられん跡お難義を掛すため人目を忍来りしハ入夫の拙者ゆゑ木内の家と思ふ番置傳覽下されたと云母の番置を讀去状と番置を火中よ打込宜も決心致されしぞ村民の爲め木内の家と思ひ升り爰へ奥女房子供出て死ぬると覺期に致しました(惣)俸共の十五才よならざる故助命とい思へ共是が一世の別れのト惣五郎子

別の愁歎有ト鐘ガ鳴(惣)最早九ツト立上る女房と母の泣伏子役い左右の袖おすがるを拂い傳機儀宜しく(母)モウ行やつしやる(惣)随分病氣を涉太切にト立上る(女)せめて此子の寐顔なりと子供を見せる惣五の顔をそむける又子役が父様と取すがると突のけ門口を外方立切涙を拂い笠よて顔を隠し向ふへは入後子役の追掛るを女房母の止め泣伏瀬を起す件にて道具廻る○本舞臺元の渡し場の道具爰惣五郎舟よ乘甚兵衛桿をさし出来り(惣)最早思ひ置事更お無ト懐中金包を出し是を取て呉よ(甚)旦那様何でムり升る鎖を打切舟を出た上の跡の咎の知れた事此金の戴き升まいト云處へ既を押分傳藏出来り不用の金から貰て遣ふ(甚)そんなら横子を(傳)隠し目付の油断なく(惣)ソウ知られたら生して置ぬト脇差を抜切て筑る立廻りの折甚兵衛以前の錠おて傳藏の肩先を切込(傳)人殺しく(惣)悪の報思ひ知れど切捨る(甚)此金の涉預り下されト其儘舟よ飛入以前の錠よて

己が肩を割入水をるを惣五見て合掌して拜後惣五殿待たし五郎兵衛抱留(惣)思ひつけあい親分様(五)委細の寺へ歸つて伺ひ升うマ駕へお乗させ(惣)それで(五)ハテ何よも云はせよ(惣)惣免下さいト駕お乗愛へ以前前の役人出て旅人待たと驚るを投る駕を上るト幕

○五幕目 一面筋堀の幕 都て上野山内夜るの体愛又仲間四人六尺棒灯提を持夜廻りふ出て浄雲院又居た惣五郎が仲間に入て呉ると酒肴をよこしたガ親分が肩を入居る一件を首尾能やりてい物と皆々下手へは入跡幕落る

○上野浄雲院の場 院主大僧正内佛又向ひ讀經の体愛へ小性門彌先又英壽院出來り明日浄成又付願の通り師の浄名代仰せ付られし上の首尾能惣五郎を(門)浄命に懸る事を知らずして浄願ヲ恐れ入ました(英)我壹人の命よて數万の農民を救事ゆゑ手引を致し浄靈屋へ(浄)惣五と呼で猶も實地を救へんと云愛へ惣五郎草履を持出來り平伏する(英)明廿日浄參願の節朱塗の段の縁の下忍び浄小性

衆のお清草履と呼を相圖又直訴すべし御威光に恐れ仕損せぬ様(惣)一世の大事必ず本意を(英)最早浄成又間も有まじ英壽院先又惣五供をして行院主門彌ハ是夕別れりと後打詠み涙おくれ見送りよて道具廻る

○御靈屋直訴の場 本舞臺真中朱塗の拜殿を内方見たる美しき道具樂大鼓打込笙簞篳の音お連徳川將軍氏綱公長上下小カ刀を差出る跡お酒井山城守其外高家兼浄小性麻上下お付添氏綱公浄段の處へ出御(山)浄清草履ト呼とたんお様の下竹の先お願書と付恐れ乍と惣五郎駈出すを見て諸士驚き惣五郎を取巻立廻りの末惣五郎を引すへ是を刻のへし願書を投書する(氏)此体を見られ何事う聞濟遣せ(山)ハ、ト願書を取上見て何下總の國佐倉領惣代公津村願人物五郎と讀惣五郎の嬉しき仕打にて引立られ下手へは入跡(山)老中浄烈席たる織越殿の領分より(氏)奮腕よりして農民騷立たる様子聞つるが夫等の義も付願ひ出しと相見得る(山)浄旋の如困窮お絶兼恐れをも

願みず(氏)願書河内へ(山)委細承知仕る(一同)寛仁大度の浄沙汰有難存じ奉つり升る(氏)然らば山城(山)イザ浄拜禮遊ばされ升と氏綱公思ひ入て道具廻る

○不舞臺元の浄雲院の場 院主經を讀て居るト門彌駈來り只今惣五郎が捕へられ待衆ガ浄直訴致せしと山門の方へ引立参りました(浄)供奉の衆迄知る上浄目よふれたお相違おし愛へ取次出來り浄詮議筋又付河内守様浄入よムり升ト案内又連河内守入來り(河)彼目おれば浄詮議中本日直訴致せし惣五郎の浄當院又止宿せしよし直訴の浄手引浄承知成るか篤と浄調下されたし(英)其浄譯英壽院仕らんと奥方切腹して門彌介抱して出て平伏する(院主)扱ひ己れが手引なせしのと涙をうくす(英)何卒よしちに(門)浄執成願奉つる(河)ハテ出家よして稀おト扇よて膝をたさ見事の浄處存ト團十郎思ひ入よて幕

○六幕目 江戸屋舖怪異の場 舞臺正面へ綱代の幕都て織越家與庭の休愛お茶道珍齋を折侍四人にて取巻應病武

士とやたゆゑ憎い奴と討を止め與惣殿への惣五郎夫婦の亡靈が出て家鳴がするト皆々驚く筋有て上手へ這入後赤石典膳横田五平太出來り惣五の祟りの恐ぬが一味の者が家鳴お驚き我々の奮愚を口外致すかと夫が心配併し國元の荷殿の者とよし合せ単人又詰腹切せ君を無者にせし上の奥方ハ赤石の物中老花の井の横田の物と密談をする處へ待女兩人出來奥様お召と云お兩人の侍女と共に上手へは入跡幕落ると(本舞臺二重正面銀襖都て與殿の庭先爰に織越正知。奥方九重。中老花の井居並び下手お以前の典膳五平太坐し(正知)此程お所勞に付役目も引居たりしが必能故快氣屈おさんど存る(與)浄快氣と聞奥向よても打揃ふて此祝宴(典)浄家中おての惣五郎の死靈の祟で浄病氣杯と(正)不届至極成取沙汰(與)浄屋敷へ怪異出ると沙汰致し升る(花)天井おて騒鼠の音迄も變化なりといとも怪お光物(典)君よ祟り致す杯と以ての外(正)領主の恥辱を返見す將軍家へ直訴おし七人の役人又切腹

させしむ彼めが業疎如きいまだ事逆疎に致しても
宜き奴ト云ふ典膳の折こそよしと又々國元にて一揆起り
彦城代へ押掛して高林隼人方より越ましたと依辨又讒
言する(正)重ね々憎き下民共と怒り侍女を酌させ大
盃ひて酒を呑爰へ向ふ彦家の大事と笠原左源太駈來り
注進しし上ると進み又國元を一揆起り此度の正雪
忠彌杯を荷膽し死を退れし諸浪人走加りしと相見此儘
捨置時ハ將軍家へ對し彦邸我君彦山馬有て彦下知下さ
るべしとの早打を聞か(正)驚き然ハ出馬致さん乗馬を庭
へと怒る奥方九重中老花の井ハ將軍家へ伺ひの上と止る
正知ハ聞入ず出馬の用意致さんと皆々附添奥へ道入典膳
左源太顔見合故障の無内乗馬を是へと云ふ五平太ハ庭屋
の方へ行跡(典)イザ某も仕度して今宵の供を退むや
あらぬと上手へハ入跡襖を左右ハ明正知兜頭巾胸當黒の
羽織馬乗袴の着附て出来るト横田下知ハ別當馬を引出
し(正)國元佐倉へ遠乗致せ(別當)エ、此夜中ハ彦國元

ト胸りする(正)ヤア高の知れたる十三里予が馬術めて
走る時ハ曉天迄ハ懸るまじ(奥)彦病中の彦身めて將軍家
へも彦届く(花)彦名代を彦立わり上ハ彦沙汰を待彦
出馬遊しませと取すがり止めるを正知承引せず馬ハ飛乗
(正)士民の一揆ハ恐れ家來を名代ハ出して予が恥辱病
中あれハ届けに及ばず跡ハ續と臣下へ達せよト馬ハ一鞭
當向ふハ駈入跡ハ川上新吾織越大和出て正知の出馬を聞
驚き家の一大事ハ止めやし上んと花道へ行時俄ハ家鳴
震動する皆々打伏るどドロくよて正面仕置場の模様疎
形にて惣五の亡靈出る皆々此体を見ると亡靈消る(奥)恐
ろしき今の有さま(皆々)是皆死靈の業成かと驚く處ハ障
子の内ハ左源太三人の惡侍各々咽へ口繩がまどハ狂ハ廻
つて出來り蛇ハ苦しめられ城代を始め典膳五平太主家を
横領し奥方を手に入んと深くも工ハ國の早打ア、苦しや
くト惡事を自分ハ白狀する(大)扱ハ百性を苦しめ殿を
恨ませしも惡人共典膳始め逆臣をト立上るト上下手ハ典

膳五平太出來り惡事露顯の上からハ切捨呉んと切懸る四
人立廻りの末大和新吾典膳五平太を殺す四人惡侍蛇ハ苦
しめられる模様よて幕
○七幕目 下總佐倉城外の場 舞臺佐倉城大手夜るの体
爰へ惡侍大勢出て浪人共ハ殿の姿ハ偽當城へ來る由江戸
表ハ報知偽者參ハ打捨呉んと忍ハ後向ふハ乘馬よて正知
駈付國の動亂ハ慎めんため正知出馬せり早く開門致せ(一
侍)城主夕夜中ハ歸國せるはづかし偽浪人討取ト大勢鎧
を以て突て蒐り大立廻りの處へ構屋五三郎出來り養父の
敵民の仇領主覺期と竹鎗にて突き蒐ると城内ハ高林隼人
惡人の首を提出て正知を助けヤイ待て五三郎の仇ハ殿ハ
非ハ典膳なり斯る逆臣を討取しと惡事露顯の筋を云ふ爰
へ向ふより早馬めて織越大和駈來り典膳五平太を討取惣
五平助力で惡侍殘す召捕(正)我名を偽り農民共を苦し
ハ予が誤り此上ハ民を救助の(大和隼人)長まりましたと
平伏し時の大鼓よて幕

二番目 上州織客使大稿
○序幕 上州八幡山坂下の場 正面石の玉垣出茶屋有爰
ハ若い者四人出て近所ハ劍道ハ流行故今日國定忠次殿の
深澤の初五郎と此社内ハ試合ハ有ハ國定親分の神影流平
石先生ハの免許取此勝負ハ深澤ハとても及ばぬ事ト云此
内石段の途中よて深澤の子分四人立聞しナハ初親分ハ負
ると云たハ覺期しると打て蒐り立廻りの中ハ茶屋の娘ハ
中裁よて忠次方ハ向ふへハ入ト石段の上ハ鳴神音右衛門
出來り忠次ハ腕づくでハ迎も親分の勝ハ取めへうら小
猿の傳吉の兄秘門院傳海ハ尾先狐を遣ふゆハ試合の時ハ
狐を玉ハ入勝を取工風と向ふを見る爰ハ法印の拵へよて
秘門院出來り(秘)試合の時ハ法力ハ忠次の眼を隠す時
ハ達人ハても恐ハにたらず先試みハ彦覽ハ入んと懷中ハ
て印を結ト子分四人一時ハ眼ハ見えぬ仕打ハ鳴神悦ハ秘
門院子分を連石段を上りハ入後向ふハ薩島勇藏ハ流脇差
よて跡ハ小川作太夫の娘ハ君ト下女ハ波を供ハ連出來り

薩島を呼止床木小腰を掛お君の通信のあきを恨み(勇)身
 身の長女の事ゆゑ是迄の事思ひ切養子を取て下され
 色愛の仕打爰へ石段の上庄屋の息子藤六出てエ、密夫
 見付た(君勇)胸りし嫁入もせぬ密夫との(藤)作太夫殿
 と約束をせし上此方の女房又成ぬといへば作太夫よ告
 勇藏の手習師匠の名を取上村を追拂ふぞ(勇)是計り(一
 君)マア待てど止るを振拂い藤六向ふへは入跡(君)藤六
 が親人(告)上内へ内へ内へ(勇)ハテ身の有付と(勇)
 人心配するを(お波)國定村へ出成り忠次よ頼われ
 べ(勇)仁義の深ひお人ゆゑ(君)助けて下される様(波)お
 頼成されまじと三人下手へは入跡男連の出成向ふ(國
 定)忠次東と深澤初五郎双方子分を運出来り(忠)今日八幡
 の神前と捧る火花の立合(初)先上州での顔役(波)の舞
 の真劍(一)二を競長脇差ト渡り演詞爰へ石段の上岩窪
 玄哲出来り双方を扱ひ(玄)土地で名賣の國定忠次一刀流
 の早業(其)名も響く初五郎立派お勝負を仕手(初)

互ひて賣出親分子分とつちが負成とも(忠)意恨の残
 さぬ達子と(子)分の奴等もそふ思へ(玄)夫て素心一足
 先へと玄哲先忠次子分石段を上りは入跡以前の鳴神小
 猿秘門院出来り深澤に引合する初五郎の狐術を聞
 悦び懐中か金を出し渡し首尾能いつたら又其時(傳海)親
 分案心成されまし(初)可憐乍も國定(真)劍勝負でたつた
 一討(皆)々思ひ入れよて道具廻る
 ○八幡山試合の場 舞臺正面朱塗の社左右巴の紋の幕を
 張毛熊を敷爰以前(國)定岩窪子分一同居并(西)の方よ
 鳴神住居行司立懸り團扇を以て東西を呼出し相中の子分
 替り(一)試合の立廻りあつて後大鼓の打込成り(玄)サ
 ア是うら深澤國定だが初五郎の未だ見得ねへト云爰へ
 初五郎先お傳海子分入来るを見て行司東西を呼上げる双
 方白布の襷鉢巻にて立出る傳海の見物人の中お隠れる
 (初)此立合迎の事(真)劍勝負として下せ(忠)何と此
 神前を血汐で撥すも本意でねへが望みとわれ(忠)是非がね



へ(玄)東西が勝ても意根が子分お残るゆゑ(真)劍勝負の腹
 お仕なせ(初)男と男が云出したから(忠)跡へ引ね(一
 真)劍勝負(玄)よ、尤もだ美事に忠初か切て仕(忠)初
 一刀を抜立上りサア(一)結寄火花を散し切結立廻り
 の内秘門院の懐中にて狐を遣ひ印を結ふ仕打鳴神の氣を
 いらち傳海を白眼るよたまりかね傳海花道よ飛出し呪文
 を唱へ此内初五郎の忠次お切立られ法力のさうぬ(忠)驚き
 傳海の一目散(向)ふへ逃入ト初五郎の刀を打落され既お
 忠次お討れんとするを見て(玄)勝負の見へた忠次持たと
 双方をなだめる忠次の玄哲(任)せ刀を鞘(納)る初五郎の
 面目無殘念の仕打みて鳴神子分附て向ふへは入跡(玄)工
 んだ事も氷の泡威勢(恐)れ狐も寄付ぬと見得ると傳海を
 頼み狐を遣はせ(忠)夫の忠次の威勢でいね
 へ死んだ師匠より譲り受たる一刀に不動の梵字が有故(忠)
 恐れて狐も寄付ぬと云爰へ女房お方(勝)負を案事(駈)來
 り手習師匠の勇藏殿(小)川様の娘を運逃て來ました(忠)

恩人の娘も拾て置れぬと立上るト道具廻る

○八幡裏竹藪の場 爰ハ深澤鳴神立懸り(鳴)今日の勝負
よ不覺を取しも傳海は欺りれ(初)狐を頼んだ事を知れた
る時の顔向が過ぎぬも殺して仕舞と云爰へ子分兩人お
て傳海を捕へ出来るを見て(初)能も恥をかしたなト切
て蒐る傳海エ、名の法印でも腕は覺の傳海だ命迄取れて
成物かチ、合點ト抜合立廻りの末傳海を殺し(初)名を得
し國定故(鳴)亡す手段後日の筋上と兩人思ひ入めて幕
○二幕目 鶴屋見勢先の体爰へ郷士氷上小軍次出てお佐
野が少しも来ぬ故歸るくと驥を若者止るト與女郎
おさの出来り小軍次を抱止引連與へは入後深澤初五郎出
來り小軍次が來居と聞借が有ゆる逢て不都合と云爰へ
お佐野来て(さ)氷上お逢きい様隅の坐敷へムんせト初五
郎を運て遁入後鳴神小猿傳吉出來り(鳴)お花を請出し國
定も鼻を明して與る(傳)試合の意恨で女を請出す杯の親
分も似合も男らしくもねへと此筋の意見を云鳴神の

怒つて傳吉の額を煙管おて打ち親分子分の縁を切二階よ
上る跡(傳)縁を切り一本立兄の敵も夫との知れを證據の
あくト二階へ駈上らんとする處へ女房駈來り抱子を見せ
て止る爰へ上手お忠次出來り此体を見て意見をして金を
送る傳吉夫婦の忠次の慈悲を悦び向ふへは入跡(忠)鳴神
の子分よしての威心を男たるアト詠め道具廻る

○本舞臺鶴屋廻し座敷の体初五郎おさの差向ひよて酒を
吞居おさの初五郎の顔色の悪いを案じる(初)風を引たど
云の偽り實ハ八幡の試合忠次の爲も恥辱を取夫も顔お
出たのよ(さ)私しが聞てさへ無念故忠次の相姪お花の平
石の娘と聞アノお花お恥をかすのコレくと叫く爰へ
鳴神出來り幸い忠次が來て居れば胸は浮んだ一ト工風と
四方見廻し三人叫く思ひ入れよて道具廻る
○同お花部屋の体爰お忠次内藏者龜吉を相手よして酒宴
をして居爰へお花出來り親分へ鼻を明せるため私しを鳴
神が身受するとの事(忠)おれが付て居るから案心していな

お花の悦ぶ爰へ下手の障子を明鳴神出來りイヤ案心の出
來りへ百兩おれへ二百兩と直増をしておれバ身請を(花)
そふ成時の死人を受ると思つておくれ(鳴)チ、身請の勝
負の金次第ト鳴神の與へは入ト鶴屋千助出來り禮をのべ
て歸る(花)私し師匠の娘として以前の恩を忘れなく勤
めの苦勞をお救ひ下され肌ふれし事いなければ共修家内が
(忠)内の奴のそんな事を氣懸る者でいなく今も身請を
して進める程よ併し今宵中よ大金がト心配の仕打爰へ
子分の二代吉が迎ひ來て今桐生の問屋へ二千兩計馬
よ付替爲が行たが馬の強氣お物ト断しを聞(忠)扱ひと思
ひ入三代吉を供よ連向ふへは入後下手お初五郎出て今三
代吉が飛脚の断しをしたら忠次の様子が替たが身受に支
へ悪心を起すも知れずコレ幸いと追駈向ふへ遁入トお花
出來り此身故お心配懸し忠次さんへ濟ぬとふさいで居ト
爰へおさの出來りお花を慰め身請の先を争ふよ手附を
渡そがうんじんお私しがお客お賞ひし此百兩と貸升程

お早く忠次さんの名前よて部屋へた渡しおさんせとの心
切お花の金を借り下手へは入跡以前の小軍次出來り百
金紛失したと駈ト若者お花が百兩手付を渡したのが不
審トお花を引立て吟味をさる(花)其お金おさのさんか
借ました(さ)私し貸た覺へりお花を賤み落し(一
さ)人の見掛お寄ぬ者と皆々下手へは入跡お花の額を起
すト藝者龜吉の介抱しては入(花)女乍も武士の娘立派
よ命をチ、そふと覺期の体よて道具廻る

○赤坂松並木の場 正面六地藏敷中夜の体爰へ忠次長
脇差よて出來り三代吉が断しよ三度飛脚の馬の附たる千
両箱是迄非道いせぬ忠次も手詰の金の血まふれ仕事濟ね
へ事だお恩有師匠へ追善ト敷の中へ忍ぶト向ふ飛脚馬
お乗り來る忠次の飛で出馬士の提灯を切落お飛脚の刀を
抜て兩人立廻りの末飛脚を殺し金を盜行を(忠)忠次待た
(忠)何と(忠)手前をぞねへ仕事をさるお(忠)エ、親父さ
ん何を云ても云譯に成る許して下せへと腹を切らんとす

○赤坂松並木の場 正面六地藏敷中夜の体爰へ忠次長
脇差よて出來り三代吉が断しよ三度飛脚の馬の附たる千
両箱是迄非道いせぬ忠次も手詰の金の血まふれ仕事濟ね
へ事だお恩有師匠へ追善ト敷の中へ忍ぶト向ふ飛脚馬
お乗り來る忠次の飛で出馬士の提灯を切落お飛脚の刀を
抜て兩人立廻りの末飛脚を殺し金を盜行を(忠)忠次待た
(忠)何と(忠)手前をぞねへ仕事をさるお(忠)エ、親父さ
ん何を云ても云譯に成る許して下せへと腹を切らんとす

るを止め(玄)今死んでも人殺しの罪い消ねへ此金の已が
預り改めお主と貸てト忠次の罪を玄哲が引受る件の筋わ
つて立上るト月隠れる上手方初五郎出来り三人無言の立
廻りの末忠次の烟草入が初五郎の手を渡り引ばりあて幕
○三幕目 國定村忠次宅の場 爰へ庄屋伴藤六入来り小
川の娘お君を出せと驥を千分大勢にて外へ突だす藤六の
怒り今又深澤か鳴神を頼んで来ると向ふへは入跡勇藏お
君出来る(お方)お二人と赤澤の親父の處へ預けんと云
處へ忠次歸り来て赤澤へ送るを止め兩人と與へ入るト向
ふより小猿の傳吉入来り鶴屋の前にて貰し金の禮とのべ
鳴神と縁切たゆゑ子分ふして呉と迫る(忠)鳴神の死を
ねへ内の子分(傳)鳴神の首を持って来たら其時の子分
よして下されと傳吉の義信をのんと歸るト爰へ三代吉來
て赤澤の提で飛脚が切れたる其賊の此村へは入たどの事
と聞た君勇藏を岩窪へ落せと云付る跡向ふ方深澤鳴神續
て藤六出来り(鳴)此屋お居と突止た小川の娘を出して下

せ(忠)女杯を置た覺へんね(初)此烟草入のお主し
の品と見せる忠次の悔りする(初)通り掛つた八丁繩手茂
る樹木の其中で儲かよ受た烟草入買て下せ(忠)も、價
の(初)大負おして五百兩三割から安い物(忠)其品
の夕べ貸たがとふした(初)も、其借主の何國誰だ(忠)エ
ト、誦る爰へ表方岩窪玄哲入来り其借主の此玄哲だど中
載小立(初)恐れ乍と代官所へ(忠)知らねへ事あら(初)何
時買お來か云と鳴神深澤の向ふへ歸る跡(忠次)最早是
迄自首する方手段あしと立上る爰へ藝者龜吉駈来りおさ
のお賊の悪名を付られし方お花さんご自害成されました
と告るト女房出てお君勇藏が鳴神の子分を連れて行れたト
云お忠次の驚き悪事と知つて得し金も水の泡と無念の仕
打て跡を玄哲小頼みお君勇藏の跡追駈向ふへは入
○敷原庚申堂の場 真中辻堂夜の体爰へ鶴屋の若者のお
さのが駈落をしたと尋ねお來て上手へと入跡辻堂の中
おさの出で深澤迄行たい物と行進る折左右の敷押分三代

吉トお方出来りおさのを引止(方)おまへが賊と落した夫
故お花さんご自害の仇其命が貰たい(忠)噂又聞た火の
車と仇名付たお方さん(方)爰で勝負の獨と一人月夜の里
の吉原から鞍替者の旅猿鬼も恐れぬ手れん手管(方)忠次
の女房の手に懸れと兩人立廻り乍此道具廻る
○入山津八丁堤の場 爰お初五郎上お忠次立廻り居(忠)
さらつて逃たお君を返して呉る(初)忠次の首と引替よ(忠)
忠)遣からさきり、勝負をしる(初)望みとあれ殺して
呉ると兩人立廻りの末ト、初五郎を切倒す爰へおさのト
お方立廻り乍兩人出来りお方おさのを切殺し是でお花さ
んの恨みもはれ(忠)深澤覺斯と刀を振上る(初)是迄なし
た罪亡し慈悲の刀で此首を(忠)扱の悔悟致せしかど兩人
の首を落す爰へ三代吉駈来り今鳴神が代官所へ訴人をし
て自分先お討手よ迎ふと(忠)シテ赤城の親分の何した
(三)一先岩窪へ落て行れました(忠)勇藏お君が身の上の
(三)夫い私ちが尋ねま升(忠)夫とやア赤城と一手よ成り

鳴神を討た上り岩窪へと刀を鞘に納め向ふを見て幕
○四幕目 赤城山坂下の場 都て岩組の道具爰へ娘お君
を中よ取巻藤六と鳴神子分等が念佛講をやらせト立廻
る時向ふ方忠次駈来り此体を見て驚き切拂ふ皆々逃ては
入爰へ勇藏兩人を相手お立廻り乍出来り兩人を切捨るを
お君見て取すがる忠次の兩人の無事を悦ぶと四方よて遠
寄ドン、の打込(忠)扱の鳴神の訴人より人数を集
ると覺へたり(勇)最早是迄とお君を殺腹を切んとするを
忠次止め此金を持って江戸へ立退時節を待て親人に詫をさ
つしやれと金を渡す兩人の伏拜み涙乍よ別れて向ふへ
は入跡忠次立退んとする處へ鳴神組子を連押来り(鳴)八
州の内命諸已れを討て是柄先の傍用聞サア尋常と繩を請
る(忠)此忠次を捕て見ろト大立廻りの末皆々を追拂ひ忠
次の赤城山へ登り行跡へ鳴神出来り此上り赤城を取巻貴
立んと行處へ以前の小猿傳吉追駈来て兄傳海の敵鳴神勝
負と切て蒐る兩人立廻りと成と狐火處々に顯れ傳吉お加

勢をして鳴神の眼を隠すト、首を打て立上るト道具廻る
 ○大語岩窪山塞の場 岩組住居の体左右は烽火を焚正面
 は玄哲白の鉢巻をし座し子分一同居並び爰へ向ふ切首
 を腰に付傳吉出来る子分が取巻を突退椽前へ進み来て約
 束通り鳴神の首を持参せしゆゑ子分よして下されたしと
 云玄哲始め皆々驚くと正面の襖を明忠次出来り床木は腰
 を掛首を實論して縁の切ども不義なる傳吉此首の鳴神よ
 むらす偽首成りと突戻し早く下山致すべし(傳)元の親分
 を殺た故義を知ぬとの仰せり尤も我兄秘門院を殺たる仇
 故鳴神の首を討しと云忠次は是を問傳吉の手を取上座よ
 居(忠)扱も見上た傳吉殿偽首と云しハ助返さん爲(傳)大
 リヤ子分おして(忠)子分に仕ねへで何とせんと首を持米
 りし禮を云爰へドン竹螺を吹立るお連女房お万駈來
 り飛脚殺しハ此お万と訴へ出し取上るく討手の頭鳴神
 タ(玄)何討手が押て來とか(忠)鳴神ハ格別上の人數よ手
 出し成ぬぞ(子分)エ、手出し成ませぬ(玄)奮怒の無手

前達ハ(忠)此金持て退散しんと金を配分して遣子分の腹
 を切んとする落ねハ子分の縁を切と情の詞よ子分皆々涙
 乍忠次を拜上手へは入跡三代吉注進に駈來り(三)傳吉が
 鳴神を打しも忠次の指令と子分等も無念の餘り無二無三
 お押寄來り升る(忠)鳴神の子分の奴等を切捨呉んと皆々
 仕度をするト爰へ大勢押來を見傳吉三代吉大立廻の末
 大勢を追懸上下手へ入又四人忠次玄哲へ薙り立廻の處
 へ向ふドンくおあり役人出來り赤澤よて飛脚を殺し金
 を盜其上關所破の大罪人又荷擔の者共此場お於てお繩
 を請(忠)悪事とあしたる國定忠次手向り仕らす(玄)
 縁お繋る岩窪玄哲女房お万子分の三代吉イザ浮繩を懸ら
 れよト皆々役人思ひ入よて拍子幕目出度く
 ○市村座茶屋万屋。山本。市川屋。大黒屋。越鉄。長谷川。田
 原屋。名荷屋。松金屋。中尾屋。万金。中菊。吉本。若万。山田
 屋。水近江。越喜。丁子屋。龜田屋。紀の字屋。新武藏
 ○明治十七年五月十九日御届濟 定價金七錢
 淺草區猿若町二丁目十一番地平民
 編輯兼出版人 大木嘉吉
 同發兌元新板堂